

令和4年度第1回 市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議 会議録

日 時 令和4年6月22日(水) 10:00~11:30

場 所 姫路市市民会館 5階 第11会議室

出席者 構成員7名 事務局5名

(構成員) 藤本 真里 座長 米谷 啓和 氏 井上 清美 氏
大西 麻衣子 氏 橋 正人 氏 前川 裕司 氏
岩田 和代 氏

(事務局) 市民参画部 平石部長、市民活動推進課 門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター 佃 所長 岸本 係長 得平 主任

次 第

1 開 会

2 報 告

- (1) 令和3年度 事業報告について
- (2) 令和4年度 事業計画について

3 議 事

活動相談の事例について

4 閉 会

会議の進行記録（要点記載）

事務局： 報告事項 1 「令和 3 年度事業報告について」を資料 1 に従って説明

座 長： 何か質問や意見等があれば発言を。

構成員： 新型コロナウイルス感染症の影響でできなかったこともたくさんあったと思うが、その一方で、対外的な動きができなかった分、取り組めたこともあったかと思う。そういった面で何か報告することはあるのか？

事務局： 昨年実施したひめじおん講座の中で、初めてオンラインで実施したものがある。他には、昨年 10 月に開催された兵庫県災害救援ボランティア活動支援関係団体連絡会議をオンラインで参加し、出席者と意見交換を行った。一方、センターでの相談業務については、まだオンラインで行っていない。なぜなら、セキュリティの面や機器の導入などのハード面をクリアしなければならないからだ。

構成員： オンラインでのネットワークを促進してきたとのことだが、これはいい点というか、この 2 年間で変わるチャンスだったと思う。

座 長： 新しく作成したボランティアハンドブックはどのような反応があったのか。

事務局： 見ていただいた方からはとても好評だ。通信制の高校から問い合わせがあり、夏休みボランティア体験（以下「夏ボラ」）の資料とともにボランティアハンドブックを送ったところ、それを見られた先生が興味をもって、7月にボランティアの講座をすることになった。

事務局： 報告事項 2 「令和 4 年度事業計画について」を資料 2 に従って説明

座 長： 何か質問や意見等があれば発言を。

構成員： 夏ボラや大学への出前講座を開催しているが、若い人はボランティアに対して、どのくらい関心があるのか。また、何年も続けていることに対しての効果はどのようなのか。

事務局： 出前講座については、以前、市内の大学に出向いたときに、担当の先生が学生にアンケートを取っていて、その結果を後日見せてもらったことがあった。感想としては、意外にもボランティアに関心がある学生が多いと思った。アンケートはその1回だけで、あとは、講座が終わった後、学生から感想を聞いたりする程度である。

事務局： 夏ボラの傾向を調べてみたが、アンケートを通して、初参加でよかったと思った人の次年度参加はほとんどなく、新規での参加が多い傾向にある。もしかすると、自身で別のボランティアをしているかもしれないが、ほとんどが一度だけで終わっている印象がある。

構成員： せっかく開催しているのに、効果が少ないのは大変残念に思う。来年の2月に第10回ひめじおんまつりを開催するときに、ボランティアに参加しませんかというアナウンスはやっていただきたい。

事務局： 出前講座などの場で積極的に案内したい。

構成員： 参加しやすいように、具体的なものを示して参加を呼びかけるのがよいのでは。

事務局： 学生の中には、単位取得が目的で参加する人がいるのではないかと思う。

構成員： このような企画においては、学校の中の調整役となる窓口と調整することが重要である。講座の後、アンケートなどで学習の効果を測定するなど、協力しあえるとよい。今年はひめじおんまつりを開催するということなので、もし調整できれば、参加は可能だと思う。学生自身も生活費等節約を余儀なくされ、経済的な面が重視される状況ではあるが、やはり、いろいろな機会に自分の社会性を広げることが大切である。ひとりでもふたりでも核になる学生がいれば、つながっていくのではないかと思うので、何か協力できればと考えている。

座長： 夏ボラに参加した学生にアンケートを取ったり、その結果を参加団体に送ったりしているのか。

事務局： アンケート結果のコピーを送っている。

座長： 相手に希望を聞いた上で、メール配信でこちらのいろいろな情報を積極的に送るようにすればよい。自分の体験したことがそこで見れると、また違う感覚を持つ

てもらえるのではないかと。SNS を含めていろいろな情報発信をしているので、是非活用していけば。

構成員： 毎月ボランティアでお城の掃除をしていて、若者が 10 名ほど参加している。終了後には今後も続けたいと言って帰るが、実際はほとんど続いていない。続いているのは子どもで、兵庫県の「ひょうご子ども・若者応援団」の体験活動に登録し、スタンプを貯めているからである。20 回参加すると表彰してもらえるので、毎回参加している。また、学生に対しては、希望者にボランティア証明書を渡している。それは就職活動のための証拠づくりになるからである。私の提案として、ボランティアスタンプ手帳みたいなものを作って、その人の学生時代のボランティア活動が見える形にしたらいと思う。例えば、ひめじおんの登録団体が活動を確認して、スタンプを押す。そういった活動がある程度続いていくと、その人にとって活動を継続させる自信になる。学生も就職活動で PR できるようにしたいと思うようになる。システムを作って呼びかけるとおのずと参加する人が増えてくるし、若い人の育成になっていくのではないかと。ぜひ、今年度は、次年度に向けての調査研究の段階として検討してみてもどうか。

構成員： ボランティアパスポートのようなイメージか。

構成員： どこでボランティアをしても同じスタンプを押すようにしておく。そうすれば、最終的にこれだけ活動しているということが見える。

構成員： センターのお墨付きという意味合いも出てくる。

構成員： 学生にとっては、単位がもらえるし、就職活動において企業側も評価の対象になるというメリットがある。

構成員： 入学時に地元の大学の 1 回生に配布し、4 年間で活用してもらうようにすればいい。

構成員： 大学にはキャリア支援センターという仕組みがあり、そこで就職活動について支援しているが、そういったところにも周知しておけば効果的だ。入学時パスポートを渡しておいて、特に市がしっかりサポートしている団体等へのボランティア活動を継続していれば、就職活動の際の強みになると思う。

座長： こういうことを頑張ったなどのコメントがあるとよい。

構成員： スタンプを押すだけでなく、回数の節目には何かプレゼントなどがあれば、継続されやすくなる。

事務局： 姫路市だけでなく、県域に拡大していけばいいと思う。

構成員： それは段階的に共有していけばいいので、まずは姫路市でやっていけばいい。

事務局： 市の予算がつくかどうかの問題だ。

構成員： 行政は、一定程度活動している実績で、次の予算をつけるというところがあるので、最初から白紙の状態で提案するとなかなか難しい。姫路市においても、ボランティアの高齢化が進み、登録者が伸び悩んでいるといった実感があるので、そこを何らかの形で支援できたらと思っている。

座長： 具体化に向けて少し検討してもらい、課題があれば相談してもらえばよい。

構成員： 第4次姫路市市民活動・協働推進事業計画は今年度何年目で、その位置付けについて知りたい。

事務局： 令和3年度が1年目なので、今年度は2年目だ。

構成員： この事業単位は5年単位か。

事務局： その通り。来年度が中間年だ。

構成員： 姫路市はSDGs未来都市となったが、それとの関係性があまり見えておらず、物足りない。今年度は特にSDGsへの取り組みに力を入れるというテーマの方がわかりやすい。個別の施策や活動についてはっきり見えた方が、センターだけに限らず、より効果的な取組ができるのではないのか。

事務局： SDGsの考え方は難しい。個人的には、フードロスに取り組んでいる団体に協力するため、食材などを寄付している。組織としてどういった取り組みをすればいいのか悩んでいる。

座長： すべての取り組みがSDGsに関係している。しかし、それをどうアピールして波

及効果を及ぼすかということに重要性がある。例えば、今までつながりのなかった団体と SDGs を絡めた新しい事業をするなどで、予算確保にもつながる。

事務局： 一例として、今年度から NPO 法人姫路コンベンションサポートが生きがいしごとサポートセンター事業を受託されたので、今年度からお互いに連絡を取り合って、事業面で連携していきたいと考えている。

座 長： 例えば、イベントの参加協力の際に SDGs のロゴが入ったポスターを掲示することで、センターがそれを意識して取り組んでいるという PR にもなる。

構成員： SDGs に関する講座は予定しているのか？

事務局： 前回の会議でご紹介いただいた方に快諾いただき、7月に開催する。はりまホッププロジェクトや姫路木綿の事業をされているので、そういうことを踏まえて SDGs の話をしてもらおう。また、すぐ取り入れられそうなので、今後、講座のポスターやチラシなどに SDGs の取組をしているということを PR したい。

座 長： 見える化だけでもずいぶん違う。

構成員： SDGs は地球規模でいろいろな課題を解決するという共通言語なので、特別に SDGs をするということに意味がない。センターの見える化も進められるし、コストもかからないので、ロゴの使用は是非とも今年度実施していただきたい。

座 長： 連携交流事業であるひめじおんまつりについて、今年度は第 10 回ということで、実行委員会も立ち上がっているが、ここ 2 年は通常が開催ができなかったということもあり、今回いろいろ工夫されると思う。並行して、前回の会議で、ひめじおんウイークとして開催するとか、市内各所や姫路駅前近くで開催するとかいろいろな提案があったが、そういった意見を含めて、次年度以降どうするのか考える必要がある。実行委員会の立ち上げ方から、運営形式や場所など抜本的な改革をするべきではないかと思う。もし、過去の実行委員長に呼びかけて、来てくれた人と議論するというのを認めてもらえるなら、実際に話し合いへの参加も可能だ。

構成員： 実行委員長をされる立場として何かご意見は。

構成員： 続けるということも大事なことで、今までのことをそのまま継続するのもいいか

と思う。例えば、実行委員長が変わったので方針が変わり、また違うことをやり出したということになると、参加される団体が疑問に思うのではないのかという考えがある。また、さきほどおっしゃったように開催場所を変えるのはいいと思うが、今のところ、基本的なコンセプトは変えない方がいいと思っている。過去にはプレイベントを姫路駅前で行ったこともあるので、そういう形をとる方法もある。大きく変えてしまうことは難しいのではないか。

座長：大きく変えたいと思っているのではなくて、これを機会に、今一度総括や方向性を見る必要があるのではないかと思う。集まった方々がやはり続けるべきだというのなら、それでいい。変えることありきではなく、一度じっくりと考えるべき時期にある。この状況がずっと続くのは、中長期的に見てどうなのか。ひめじおんまつりの目的というのは、市民活動グループ同士の交流であり、市民に向けての活動PRだと思う。

構成員：何に重きを置くかによって変わってくると思う。市民に対してアピールするのであれば、開催のやり方を変えるというのもひとつの方法だと思う。広く浅くやるとか、いろいろなところでやるとか、自治会活動を取り組んで、そこで行っているものをひめじおんまつりの冠だけつけて、参加団体ということで実施するとか、今の考えではそちらの方がいいのかなと思っている。今回の運営方針で自治会活動をどうするかということが書いていないので、できれば自治会活動をうまく利用して何かできないかと考えている。ただ、今は何をしたらいいのか提案はできない。

構成員：例えば、公民館活動とか。

構成員：自治会活動は地域ごとに何かやっていることがあると思うので、それを取り上げるとか。そういうことで地域の活性化ができるのではないか。

構成員：前回、意見が出ていた「こころのまつり」の市民活動版が負担も少なくすむ。例えば、ひめじおんまつりを1週間の開催とし、その期間中に姫路駅周辺や市民会館で行い、自らの団体の発表は1日だけにし、あとは訪問して交流するというようにすれば、いろいろな出会いがあると思う。それぞれの団体ごとに広報活動はするので、集客についてはあまり気にしなくてもできるのではないか。

座長：当初は、センターの登録団体同士の交流がすごく重要だという意見が強かったが、いざ、ひめじおんまつりを始めると、忙しくて交流している暇がない。最後の交

流会で振り返りをしたりして、いろいろと工夫はされているのだが。先ほどのご意見のように、そこに訪問し、そのグループとじっくり話ができるというのは良いことだと思う。

構成員： コロナの前と後で同じことをやっても意味がない。組織は常に何割か新しいものを入れていかなければならない。トレースだけしているとマンネリになったり、新しいつながりを生む活力がなくなって疲弊するので、そういう点でみたとき、今年度の事業計画の真新しい部分について教えてもらいたい。

事務局： 確かに昨年度とあまり変わらないことを書いているが、計画の段階では思いつかないこともある。最初から線を引いて絵を描いていくよりも、他から相談を受けたときにいいアイデアが浮かぶこともある。予算の少ない中でやりくりしているので、様々な支援や知恵を借りてやっていきたいと思っている。今、実施している事業の中には他都市への視察によって参考にしたものもあり、コロナの影響でここ何年間か実施できていないが、今年度は他都市への視察をしたい。他を見て知ることがある。特にセンターは数少ない公設公営であり、同じような悩みを持っているところから話を聞きたい。

座長： 類似都市を見ていても新しいことができない。違うところこそ見た方がよい。先ほどの意見を聞いて、事業の枠組みについて次年度の予算を考えるときに、センターの人と一緒に何をすべきか議論することが重要ではないか。たとえ予算が取れなくても、実績を残していけば、いつか取れるようになるかもしれない。そうすると、前年の夏ぐらいまでには考えておく必要があるかと思う。

事務局： 議事「活動相談の事例について」（『①妻が末期がんであるという男性』と『②障害者通所支援施設の相談支援員』からの相談）を資料3に従って説明

構成員： 一例目の補足として、相談者はもう少し活動を広げたいということで、法人化を検討していた。前段階では、有志でもいいからきちんと組織化していきながら、自信がついたら法人化していったらいいとアドバイスをした。セミナーも開催しており、その後方支援も行なっている。二例目は、行政として対応したとき、少しでもミスをすると、大きなクレームになってしまうおそれがあるので、対応が難しい。

事務局： 福祉の制度はよく変更されるため、対応が難しい。また、ボランティアは何でも

してもらえんと思って相談してくる方もいる。

構成員： ひめじおんの場合は市民活動のワンストップであって、深く入っていくのはかえって大変で、リスクもある。相談を受けたときには、相談はここでしてくださいと担当部署へつなぐべき。中途半端に意見を言うと、それに頼られて深みにはまってしまうおそれがある。

座長： 姫路市社会福祉協議会でも同様の相談が多いと思うが、どうか。

構成員： 相談によってできることとできないことがあるので、我々もつなぐということもいつも意識しながら取り組んでいる。今回の事例にあったように、すべてをやってあげるということではなく、その方が主体となってやっていくため、こちらはいろいろな情報を持って、それをつないでいくということが役割だと思っている。この事例では、NPO や行政の担当課にも相談しているので、役割を果たしていると思う。

構成員： 今回の事例は、通所施設の相談支援者ということだが、その方自身もいろいろな情報を持って、センターの方にも相談されたのではないかと思う。センターの対応は筋道だっている。施設の支援者となると、施設を所管する障害福祉課だと思うので、この対応についてはこれでよい。公設公営で運営しているセンターなので、こういった相談もあるということを行政のネットワークで報告されていくと、よりいいのではないかと思う。

座長： 制度の谷間の問題は主管課の問題であって、センターで解決することではない。紹介するということが非常に重要で、相談者からの言葉をできるだけ正確に伝えるということが大切である。また、同じ行政機関だからこそ、正確に担当課がわかる。市民からは行政の担当部署は名前だけでは判断しにくい。それを正確に伝えることは大切なことだ。

構成員： 切実な問題を持っている人は、誰かに聞いてもらうことで、半分解決すると思う。

座長： その他、本日の会議全般について何か。

構成員： これからの社会を変えていくのは、高齢者のボランティア参加だ。60歳で退職して以降、その生きがいの中でボランティアをするというキーワードはあまりない。一方で、有償ボランティアであればやってもいいという人はけっこういる。実は

この有償ボランティアの中に社会を解決する道があると思っている。シルバー人材センターはそこまで支援する機能がないし、生涯現役推進室もボランティアセンターというキーワードがあまりないので、ひめじおんが、高齢者向けのボランティアメニューを用意してはどうか。例えば、生涯学習大学校でボランティア講座を開催し、その中でお互いにつながりを持てるようなプログラムを作成する。それには、自治会が重要な役割をもつ。自分たちのまちだけでなく、地域全体のことが共有できるような話し合いをしてもらう。

構成員： 今の話は、マッチングということか。

構成員： 地域貢献という中で、高齢者は時間があり、無償ボランティアでなく、有償ボランティアだと意識も高まってくるので、その辺りをうまくつないでいけば。

構成員： 市民活動・ボランティアサポートセンターでは、無償ボランティアのマッチングしかしていないのか。

事務局： 基本は無償だが、団体によっては費用が発生することもあることは説明している。

構成員： 無償ボランティアと有償ボランティアをきちんと区分けして見えるようにしておいた方がいいと思う。

事務局： 有償ボランティアに支払われる謝礼について、過去に国税局から指摘されて課税対象になった事例もあり、慎重に対応する必要がある。

構成員： スキルアップであったり、人材育成や学習の仕組みを一緒に考えていかなければという観点から、今の発言をされたのだと思う。とても関心を持った。